

状態変化の方向と「ている」

小西 正人

抄録:「これ、だいぶ真っ直ぐにしたけど、まだ少し曲がっている」という文では、状態変化動詞「曲がる」が用いられているにもかかわらず、実際に直前に起こった「状態変化」は「曲がる」とは反対方向のものである。本稿ではテイル形でこのような現象を示す場合について分析を行った。はじめにこのような現象を示す動詞をいくつかの類に分けて挙げ、「下限閉鎖・段階的スケールをもつ動詞（一部を除く、後述）」、「通常の状態」が設定でき「異常な状態」への「変化」を表す動詞、および「(奥田 2015 でいうところの) 状態動詞」がこのような現象を示すのに対し、いわゆる結果動詞のうち「段階的スケールをもたない動詞」、「下限開放スケールをもつ動詞」はあてはまらないこと、また「下限閉鎖・段階的スケール」をもつにもかかわらずこのような現象を示さない動詞については、それらの動詞が語彙的に「変化の方向性」をもつためであることを主張した。またいわゆる「単純状態」を表すテイル形について、結果状態（の持続）を表すテイル形との違い、その意味の生じる機序、その意味をもつことのできる動詞という観点から金田一（1950）をはじめとする先行研究を検討し、本稿の扱う現象にあらわれるテイル形との比較を行った。

キーワード：状態変化動詞、変化の方向性、「単純状態」を表すテイル、程度スケール

1. はじめに

現代日本語のアスペクト接尾辞「テイル」には、「遊んでいる、食べている」などのように特定の動的事象が継続中であることを表す用法のほか、「壊れている、倒れている」などのように特定の変化により引き起こされた結果の状態が持続中であることを表す用法があるといわれる（「座っている、開けている」などのように特定の状態の維持を表すこともできる）。

しかし次の例においては、テイル形が用いられているにもかかわらず、必ずしも基体動詞によって表される（はずの）変件事象の「結果」の状態が持続しているというわけではない。

(1) a (だいぶ曲がっていた棒を真っ直ぐにのばしてみた後で)

これ、だいぶ真っ直ぐにしたけど、まだ少し曲がっているんだ。

b (解凍のために冷凍庫から取り出しておいた魚を見て) この魚、まだ半分凍ってる。

c 一晩寝てだいぶ回復したけど、実はまだちょっと疲れている。

それぞれの例において実際には「曲がる / 凍る / 疲れる」とは反対方向の変化が起こった後の「結果状態」が対象にあらわれているにもかかわらず、それぞれ「テイル」形で（変化後の）状態を表すことができる。

それに対し、以下の例では反対方向の変化を表す「状態変化動詞」を基体としたテイル形では対象の状態を記述することは非常に難しいか、不可能である。

- (2) a (一度とけた氷を再び凍らせている途中で) ^{??/*}まだ だいぶ / 少し とけている。
b ^{??/*}だいぶ離れたけど、まだ近づいている。(cf. だいぶ離れたけど、まだ近い.)

本稿ではこの現象について、状態変化動詞が語彙的意味としてもつ「程度スケール」および「変化の方向性」という観点を導入した分析を行う。はじめに第2節において、上述のような「語彙的意味としてもつ（と考えられる）変化の方向とは反対の変化が起きたにもかかわらずテイル形で対象の状態を記述することができる」動詞および「できない」動詞を挙げ、それぞれの共通性および理由について分析するとともに、動詞が語彙的にもつ意味およびその場合に用いられるテイル形の性質について考察する。第3節ではいわゆる「単なる状態」を表すテイル形についての先行研究を検討し、本稿で扱う現象を示すテイル形について述べる。第4節は本稿のまとめおよび今後の課題について述べる。

2. 同じようなことができる動詞、できない動詞

2.1 現象の確認

はじめに、本稿で扱う現象および「テストフレーム」について述べる。

本稿は「状態変化動詞のテイル形は「結果状態の持続」を表すといわれるが、その動詞が通常表す状態変化と反対の方向への変化が起きたにもかかわらずテイル形で対象の状態を表すことができる場合（あるいはできない場合）があり、それについて分析を行う」という目的をもつものであり、（状態変化）動詞についての網羅的な記述・分析を行うことを目的とするわけではないため、分析対象を以下のように限定する。

まず分析対象としていわゆる「状態変化動詞」を用いる。したがって通常、状態変化を必然的には伴わないとされる動詞（「歩く」「叫ぶ」「叩く」など）およびテイル形をもたない状態動詞は原則的には扱わない。また状態変化動詞とあわせて論じられることの多い「移動動詞（位置変化動詞）」については適宜参照するが、基本的には本稿で扱う現象にはあまりなじまないようである。

上述した本稿の目的に適うための条件を満たす文型としては、例（1）でもみたような「まだ {半分 / 少し / じゅうぶん / けっこう / だいぶ} ~ている」などの形が典型的である。これらの条件を満たす場合、状態変化動詞とは一般にみなされていない動詞であっても考察の対象とする。

2.2 本稿で扱う現象を示す動詞

ここでは本稿で扱う現象を示す動詞について、いくつかの類にまとめながら確認する。

1) 「曲がる」類：語彙的に下限閉鎖程度スケールをもつ動詞

対象の物理的状态を表す動詞で、本稿の考察対象とする現象を示すものには、上で挙げた「曲がる」のほか、「濡れる、汚れる、混じる、湿る、ふやける、かすむ、傾く、歪む、泡立つ、たるむ、たわむ、ゆるむ、絡まる、ねじれる」などがある。

- (3) a だいぶ乾いたけど、まだ濡れている。
b きれいに洗ったけど、まだ少し汚れている。
c がんばって真っ直ぐにしたけど、こうやって見るとやっぱり少し傾いている。

これらの状態変化動詞に共通する特徴は、それぞれの動詞が語彙的にもつ程度スケール (cf. 小西 2015) が、段階的なものであると同時に、それが「下限閉鎖」スケールであるということである。例えば「濡れる」という動詞は「まったく濡れていない状態 (=乾いた状態)」を下限とし、そこから「濡」方向へ段階的 / 漸進的に増大する¹⁾ という程度スケールを語彙的にもつ²⁾。

Kennedy and McNally (2005) では、英語の形容詞と関連するスケールのタイプとして、それぞれの境界に注目して「完全開放スケール / 下限閉鎖スケール / 上限閉鎖スケール / 完全閉鎖スケール」の4種類を挙げ、特定の副詞との共起制限について述べている。また Kennedy (2007) では下限閉鎖スケールをもつ形容詞について “MINIMUM STANDARD absolute adjectives, ...simply require their arguments to possess some minimal degree of the property they describe” と述べ、The gold is impure. / The table is wet. / The door is open. / The rod is bent. という例を挙げている (Kennedy 2007: 21-22)。状態変化動詞もこのようなスケールを語彙的にもつ動詞であると考えられ (cf. Kennedy and Levin 2008, 小西 2015)、本稿で扱う現象を示すのはそのなかでも「下限閉鎖スケール」を語彙的にもつ動詞類である³⁾。

2) 「積もる」類：対象の量や部分が增大する動詞

対象における状態の程度が変化するというよりは、変化対象の量が增大したり、状態変化を示す対象の部分が增大したりすることを表す動詞も、本稿で扱う現象を示す動詞類である。

- (4) a 雪はだいぶとけたが、まだ少し積もっている。
- b (指に刺さった一本の棘について) だいぶ抜けたが、まだ少し刺さっている⁴⁾。
- c かなり元に戻したが、まだ若干めくれている。
- d まだ少し重なっている。
- e 閉めたはずなのに少し開いている。

このような動詞にはほかに「集まる、たまる、まくれる、塞がる、かぶさる」などがある。「曲がる」類の動詞が程度スケールにおいて段階性を示すのと異なり、これらの動詞の場合は対象の量や部分において段階性を示すという特徴がある⁵⁾。

3) 「濁る」類：「通常の状態」から「異常な状態」への「変化」を表す動詞

ほかに本稿の扱う現象を示すものに「濁る」などの動詞がある。これらの動詞は「「通常の状態」から外れ、ある種の「異常な状態」へ「変化」する」ことを表す（「散らかる、尖る、濁る、偏る、錆びる、反る、乱れる、ずれる、へこむ⁶⁾」など）とまとめることができる。

また身体的に「通常の状態」から「異常な状態」への「変化」を表す「(お腹が) すく、(喉が) 渇く、酔う、疲れる、腫れる、(目が) 霞む、むくむ」などの動詞⁷⁾、心理的に「通常(の) (平静な) 状態」から「異常な状態」への「変化」を表す「悩む、迷う、浮かれる、困る、(気に) なる、心配する、憧れる、喜ぶ、甘える、おびえる、苛立つ、傷つく、退屈する、混乱する、困惑する」なども含まれる。さらに、天候に関する動詞（「曇る、荒れる」など）、身体的特徴に関する動詞（「太る、肥える、痩せる」など）などもここに含まれる。

- (5) a だいぶ片づけたがまだまだ散らかっている。
 b 仮眠をとったけどまだ少し酔っている。
 c この間ほどじゃないけど、まだちょっと悩んでいる。
 d だいぶ晴れてきたがまだ少し曇っている。

4) 「見える」類：知覚動詞

通常は状態変化動詞とされないが、感覚を表す「見える、聞こえる、におう、(～の味が)する」などについても次のような例を挙げることができる。

- (6) もうほとんどかすれてしまっているが、まだかろうじて見えている。

5) 「こむ」類：状態動詞 (奥田 2015: 28-31)

このほか、奥田 (2015) が「状態動詞」とよんだ一群の動詞のなかにも本稿で扱う現象を示すものが多く存在する。奥田 (2015) はアスペクトについて述べた箇所において「「ふるえる」「しびれる」「いたむ」「うづく」「つかれる」「くたびれる」「いらいらする」「たいくつする」のような、生理・心理的な現象をさししめす動詞は、動作も変化も表現していない。ただの状態をさしだしているにすぎない。この言語的な意味のカテゴリーとしての《状態》は、時間のながさをもっている、一時的な出来事をとらえているわけだが、その出来事は変化の結果として生じてくるものではない。(中略)この種の状態動詞も継続相のかたちをとって、継続のなかの状態をあらわすわけだが、その語彙的な意味において持続的であるために、完成相においても継続のなかの状態をあらわすことになる」(奥田 2015: 29) と述べ、情動・生理的な状態を表すもののほかに「居場所の状態をしめすもの」や「自然現象をしめしている動詞」も状態の動詞としてみなすことができるとして「にぎわう、こむ、こみあう、ざわめく、混雑する」「ひかる、かがやく、きらめく、しける、あれる / ひえる、いてつく、むす、なる、ひびく」を挙げている (奥田 2015: 31)。このうち、本稿 3) で「通常の状態」から「異常な状態」への変化として挙げた「たいくつする」などのほかでは「こむ、むす」などが明らかに本稿で扱う現象を示すと考えられ⁸⁾、ここで挙げられている動詞のほかにも「むかむかする、疑う、憎む、支持する、用心する、警戒する」などがこの状態動詞類に含まれる。

- (7) a だいぶ道がすいてきたが、まだまだこんでいる。
 b だいぶ涼しくなったが、まだ少しむしている。
 c だいぶ疑いは晴れたが、まだ少し疑っている。

これらのほか、「すべすべする、ざらざらする」など感覚 (および関連する状態) を表すオノマトペ関連の動詞もここでの「状態動詞」に含めることができ、やはりその多くが本稿で扱う現象を示すようである。

2.3 本稿で扱う現象を示さない動詞

ここでは、2.2 と異なり、本稿で扱う現象を示さない動詞について考える。

はじめに確認するが、2.1でも述べたとおり、本稿で扱わない動詞（状態変化を必然的に伴わない動作動詞や、テイル形をもたない動詞など）はここでもとりあげない。

1) 「(電気が) つく」類：状態が二値的な動詞

「(電気が) つく」などの動詞は、基本的に「点灯状態/消灯状態」などという二値の状態における変化を表すため、「中間段階」がなく、したがって反対方向の変化（例えば「(電気が) つく」であれば点灯状態から消灯状態への変化）が起きたときに当該の動詞を用いて事態を記述することは不可能である。このような動詞には「生まれる, 絶える, 滅びる」などの出現/消滅動詞, 「着く, 到着する, 達する」などの到達動詞, 「取れる, 外れる」などの着脱動詞, 「座る, ぶら下がる, (帽子を) かぶる, 乗る, 触る」などの再帰的動詞（姿勢動詞や着衣動詞, 接触動詞など）, そしてそれ以外でも通常「中間段階」を想定しにくい変化を表す状態変化動詞「(電気が) つく, 折れる, 倒れる, 決心する」などがある。またいわゆる（結果）状態を語彙的に明示した「60°に曲がる, 6mに広がる」などもこの類に含まれる。

2) 「失望する」類：程度の大きい状態への状態変化を表す動詞

また二値的ではないものの、程度の大きい状態への状態変化を表す動詞⁹⁾の場合も、本稿で扱う現象を示しにくいようである。例えば「失望する」という動詞の場合、「失望」の程度を段階的に順序づけることが難しく、したがって「反対方向への状態変化」が起きた後でもまだ「だいぶおさまったが、さっきほどではないにしてもまだ失望している」などのようにいうことは非常に難しいようである。そのようは動詞にはほかに「意気消沈する, 潤う, やせ細る, 曲がりくねる, にぎわう, もりあがる, 狂う（ただし「時計が狂っている」は可能）」などがある。

3) 状態変化他動詞

状態変化動詞であっても主語に（変化を起こす）意志的な使役者をとる状態変化他動詞である場合、テイル形は「動作継続」を表すとされており¹⁰⁾, そのような場合も本稿で扱う現象を示すことはない。状態変化動詞とあわせて論じられることの多い「食べる, 建てる」などの増分動詞も他動詞であり、ここに含まれる。

また自動詞であるがテイル形で「維持」を表す動詞（姿勢動詞など）は、おもに二値的であると同時に意志的動作者が関与するため、本稿で扱う現象を示すことはない。

4) 「乾く」類：下限開放程度スケールをもつ動詞

また下限開放程度スケールをもつ状態変化動詞もこの現象を示しにくいようである。

そのうち上限閉鎖程度スケールをもつ動詞に「乾く」があるが、この動詞は「濡れる」とともに「乾-濡」スケールをもつ動詞で、「まったく濡れていない状態=完全に乾いた状態」を限界点としてもつこのスケールは、「濡れる」の場合はこの点が「下方」の限界点として作用するのに対し、変化方向が逆転する「乾く」の場合はその点が「上方」の限界点として作用する¹¹⁾。その結果、以下のような差が生じる。

- (8) a だいぶ乾かしたが、まだ少し濡れている。
 b *だいぶ濡らしたが、まだ少し乾いている。

同じように「上限閉鎖・下限開放」スケールを語彙的にもつ状態変化動詞として「澄む、満ちる、建つ、沸く、整う、揃う、まとまる、揚がる（揚げ物）、煮える、治る、直る、悟る、黙る、丸まる、靡れる」などがある。

また下方同様、上方も開放したスケールをもつ状態変化動詞も基本的にはこの現象を示すことがない。これらの動詞には形容詞と語幹部分を共有するものが少なくないが、必ずしも対応する形容詞をもたないものも含まれる。

- (9) a *だいぶ落ち着いてきたが、機運はまだまだ高まっている。
 b *一時期よりは弱まったが、批判はまだ強まっている。
 c *だいぶ伸ばしたが、まだ縮んでいる。
 d *少し離すことに成功したが、かなり近づいている。

このような「完全開放」スケールをもつ動詞には、形容詞と共通する部分をもつ「高まる、広がる、広まる、狭まる、温まる、強まる、弱まる、薄まる、清まる、深まる、鈍る」などのほか「強化する¹²⁾、低下する」などの漢語サ変動詞、形状変化を表す「縮む、伸びる、膨れる、膨らむ、しぼむ」、位置変化を表す「上がる、下がる、近づく、(近)寄る、遠ざかる」¹³⁾、量的な変化を表す「増える、減る、減少する」などがある。

これらの動詞の場合、本稿で扱う現象を示さない原因のひとつとして、対応する形容詞の存在を挙げることができるかもしれない。

- (10) a だいぶ冷めてしまったけれど、まだ {*温まってる / 温かい} よ。
 b かなり解明されてきてはいるものの、まだまだ謎は {*深まっている / 深い}。

ただし上にも示したとおり「縮む」などのように（形式的に）対応する形容詞がない動詞も多く存在しており、完全開放スケールをもつことが主要な原因であることはまちがいない。

5) 「定まる」類：「異常な状態」から「平靜な状態」への変化を表す動詞

2.2 でみた「通常の状態」から「異常な状態」への変化を表す動詞に対し、「定まる、静まる、安心する、安定する、(事態 / 気持ち) 落ち着く、安らぐ、和らぐ」などのように「異常な状態」から「平靜な状態」への変化を表す動詞は、基本的には本稿で扱う現象を示すことがない。これらの動詞は「平靜な状態」を上限とする閉鎖スケールをもつと考えることもできる。

6) 「腐る」類：下限閉鎖程度スケールをもつが本稿の扱う現象を示さない動詞

2.2 では、本稿で扱う現象を示す動詞として下限閉鎖程度スケールをもつ動詞の例を挙げた。しかし下限閉鎖程度スケールをもつにもかかわらず、そのような現象を示さない動詞も少なからず存在す

る。ここではその例を少数挙げるにとどめ、2.4において分析を行う。

- (11) a *だいぶもとに戻ったが、まだ少し腐っている。
b *寒くなったのでほとんどもとの氷に戻ったが、まだ少しとけている。
c #誤って染色してしまったためすぐに洗ったが、まだかなり染まっている¹⁴⁾。

いずれの動詞も「少し腐っている / とけている / 染まっている」というテイル形で程度が小さい状態を叙述することができ (cf. 「少し *電気がついている / *涸れている / #広がっている¹⁵⁾」) するため、段階性をもつ動詞であり、かつ下限閉鎖程度スケールをもつ動詞であることがわかる。

2.4 分析

Kennedy and Levin (2008) は、Kennedy and McNally (2005) などで提示したスケール構造を形容詞の意味だけではなく動詞の意味にまで拡張して用いることができるようにした。ここでは、本稿に関連する部分だけを簡単に述べる。

Kennedy and Levin (2008) では形容詞派生の状態変化動詞について「事象開始時 t_1 の対象 x の程度 d_1 」と「事象終了時 t_2 の対象 x の程度 d_2 」というふたつの程度値を設定し、 d_1 を下限値とする程度スケールを形容詞から派生する。あとは形容詞の場合とほぼ同じで、その結果、上限閉鎖程度スケールをもつ動詞は基本的に対象の程度がその値に達する変化を記述するのに対し、下限閉鎖程度スケールをもつ動詞 (すなわちすべて) は対象の程度が少しでも上方に変化すれば「変化達成」となるとしている (日本語については小西 2015 において、Kennedy and Levin 2008 の問題点を挙げながら事象投射理論に基づく分析を行なった)。

しかし第1節でも述べたように、ここで「状態変化動詞」は状態変化事象を前提せず、むしろ実際には反対方向への変化があったことを明示することさえ可能であることから、ここでのテイル形は「状態変化の結果状態」を表すとは考えられない。いわゆる「単なる状態」を表すテイル形については第3節で詳しくみることにして、ここでは本稿の対象とする現象を中心に考察を進める。

これらの動詞のテイル形が「状態変化の結果状態」を表すのではないとはいえ、対象の (ある種の) 状態を表していることはまちがいない。寺村 (1984) は「その眼前の事態の、他者と比較してのありかたを描こうとする方向に傾くとき、動詞の一つのアスペクトを表わすというよりも、形容詞のような性格を帯びるようになる」(寺村 1984: 137) としてこのような形を挙げており、ここでもその考えを支持する (詳しくは 3.1 でとりあげる)。そしてそのような意味を表すことが可能となる必要条件として、寺村 (1984) でいうところの「他者」の程度値、すなわち「標準値」が語彙的に決まっている¹⁶⁾ ことを指摘したい (cf. Kennedy and McNally 2005, Kennedy and Levin 2008)。

2.2 で挙げた動詞類のうち、1) 「曲がる」類については、標準値は程度スケールの下限値であり、それよりも少しでも値が上回ると「曲がっている」と記述することができる。そのため、原則的には、個々の文脈や「他者」の実際の値を顧慮することなく、当該対象の程度値をスケール上に配置した時点で「曲がっている」か「曲がっていない」かを判断することができる。

2) 「積もる」類については、対象の量あるいは「内部」がスケールとなり、該当する対象がまったくない場合、あるいは対象の部分 / 領域のすべてがテイル形で記述される状態に該当しない場合がそ

れぞれの下限值となる。そして「(雪が) 積もる」という場合であれば少しでも雪が積もり、「(紙が) 重なる」という場合であれば少しでも紙が重なっていれば、それぞれ「積もっている」「重なっている」と記述することができる。

3) 「[通常の状態]から[異常な状態]への[変化]を表す動詞」においては、標準値は文字どおり「通常の状態」の程度値となり、それが特定の対象の通常値であれ、他の一般の個体の標準値であれ、その値とは異なる「異常な状態」の程度値であることをテイル形で記述することができる。これまでの動詞と同様、状態変件事象を前提する必要はなく、いわゆる語彙的な「標準値」があれば記述は可能となる。

4) については「よく見える」「あまり(よく)聞こえない」などということができることから、「まったく見えない/聞こえない」という値を下限值とする知覚に関する程度スケールが存在すると考えることができる。

以上の1)から4)が、本稿が扱う現象を示すことができる理由として「それ以前の事象に言及することなく対象の(言及時における)状態を記述することができる」という共通性をもつことを挙げることができる。すなわち「曲がる」類であれば、対象の状態が下限値(真っ直ぐ)を少しでも超えていれば、以前の状態がどのようなであったかにかかわらず「彎曲状態である」ということができるし、また「積もる」類であれば、同じように以前の状態にかかわらず、現にいま「積雪状態である」ということができる。この場合、基体となる動詞は時間軸に沿った、スケール上の値の(時間的)変化、すなわち「対象の状態の初期値と終了値との(正方向の)差異」を表さず、テイル形とともにスケールに基づいた「非時間的」な(標準値との)差異(寺村(1984)のいう「他者と比較してのありかた」を含む)を表しているのである。

5) については、スケールとは別の理由によるものであると考えられる。残念ながら本稿では詳細を明らかにすることはできないが、1)から4)と同様、以前の事象と関連させることなく言及時の状態を記述することができるという性質を共通してもつことが理由であることはまちがいない。

それに対して本稿が対象とする現象を示さない動詞のグループは、その理由がさまざまである。こちらもひとつひとつみていこう。

1) 「(電気が) つく」類については、状態が二値的であるために段階性を示すことができず、したがって本稿の対象とする現象を示さないが、程度スケールに関していえば上限・下限の両方の限界をもつ完全閉鎖スケールであり、テイル形としては「以前の状態に関係なく言及時の対象の状態を記述することができる」と考えてよい。これは2)程度の大きい状態への状態変化を表す「失望する」類についても同様である。3)状態変化他動詞についてはここでは特に扱わない。

4) 「乾く」類のように下限開放程度スケールをもつ動詞については、上限が閉鎖している場合と開放している場合とに分けて考える。はじめに上限閉鎖・下限開放程度スケールをもつ動詞(「乾く、治る」など)であるが、これらの動詞は第一義的には「対象の程度が上限値に達する」ことを記述する動詞であり(cf. Kennedy and Levin 2008)、以前の状態変化を含意せずに対象の状態を表す場合は、対象の程度がその上限値でないかぎりテイル形で記述することはできない(すなわち上限値以外はすべて「乾いていない」となり、多少の不自然さはあるものの「だいぶ乾いたけどまだ乾いて(は)いない」ということができる)。また上限・下限ともに限界値をもたない完全開放程度スケールの場合、

基準となる点である「標準値」がないため、特定の時点における対象の程度値を特定のスケール上に配置しても、それが「標準値から正方向に差がある（すなわち「標準値 < 対象の程度値」である）」かどうかを判定することができず、a) 解釈できないか、あるいはb)「直前の状態変化事象」を想定しその「初期程度値」を設定する解釈をとる、またはc) 文脈による「標準値」を読み込むということになり、本稿で扱う現象を示すことが難しくなる（上述のc)の場合にのみ解釈可能）。5)「定まる」類についても、基本的には「下限開放・上限閉鎖」スケールをもつ動詞と同様であると考えられる。

ここで問題は6)「腐る」類である。これらの動詞は、先に本稿で扱う現象を示す動詞として挙げた「曲がる」類などと同様に下限閉鎖程度スケールをもつが、本稿で扱う現象を示さない動詞である。これらの動詞について、本稿では「語彙的に変化の方向性をもつ動詞」として、2.2で挙げた「程度スケールの方向性をもつが、「変化」の方向性については未指定あるいはキャンセル可能である動詞」と区別する。

「変化の方向性」のもちかたについてはふたとおりあるようである。ひとつは「実際の現象として不可逆的な変化」を表す動詞で、「腐る、焦げる、更ける、枯れる、飽きる、（夜が）明ける、焼ける、ゆだる、炊ける、練れる、蒸れる」などがある。これらの動詞が表す状態変化事象は基本的に不可逆なものであるため（例えば通常焼けたり腐ったりしたものが元の状態に戻ることはない）、動詞が記述する状態変化の方向が決まっている。これらの状態変化動詞は、下限閉鎖程度スケールをもち、少し腐っただけでも「少し腐っている」という記述が可能であるにもかかわらず本稿で扱う現象を示すことがないのは、動詞が語彙的に「変化の方向性」をもつためである。

もうひとつは純粋に「変化の方向性」をもつ動詞で、「とける、砕ける、剥げる、染まる、癒える、懲りる、（目が）覚める、育つ、なつく、飽きる、抜ける、ほどける、こぼれる、（箱が）つぶれる、えぐれる、削れる、崩れる、ほぐれる、（字が）消える、変わる」などがある。これらの動詞は文字どおり「定向変化」を記述する動詞で、同じ程度値を示す場合であっても、反対方向の変化により当該の状態になった対象であれば、これらの動詞を用いて記述することはできない（cf. 本稿例（2））。また「すり減る」などの複合動詞などもここに含まれる。

- (12) a (紐を結ぶとちゅうで)*だいぶ結べたけどまだ少しほどけている。
b *この線、だいぶ濃くしたけれどまだまだ消えている。

これらの動詞が本稿で扱う現象を示すことがないのは、語彙的に下限閉鎖程度スケールをもつにもかかわらず、変化の方向性についても語彙的な指定があるため、当該の状態に至る状態変化事象を必然的に要求することとなり、非時間的な「他者や自己標準値と比較してのありかた」を記述することができないためであると考えられる¹⁷⁾。

3. 「単なる状態」を表す「テイル」

第1節でも述べたとおり、本稿で扱う現象に用いられるテイル形は「動作継続」や「維持」はもちろん、「結果状態持続」でもありえない。それは「反対方向への変化が起きた」ことを明示的に述べているためである。そして同様の理由で「パーフェクト」としての解釈も不可能であるとする、このテイル形はいわゆる「単なる状態」を表すテイル形ではないかと考えることができる。

この「単なる状態」を表すテイル形について、例えば日本語記述文法研究会編（2007: 34）では「変化を表す動詞のシテイル形は、基本的に結果の残存を表すが、次のような例では、動きの過程を想定せず、その時点で存在する状態として述べている」として「この道は曲がっている / お皿の縁が丸くなっている」という例を示すのみで、ほとんどふれられていない。

本節ではこの「単なる状態」を表すテイル形について、その形がもつ意味および「結果状態の持続」を表すテイル形との関係（3.1）、「単なる状態」という意味が生じる機序（3.2）、そしてその意味をもつことができる場合あるいは動詞（3.3）について、金田一（1950）以来の先行研究を検討し、本稿で扱う現象におけるテイル形との関連を述べる（3.4）。

3.1 「単なる状態」を表すテイル形の意味および「結果状態の持続」を表すテイル形との関係

テイル形は動作継続・結果状態持続などの主要な意味のほかに、「単なる状態」を表す用法があるとされている。この用法については金田一（1950: 49）が「いつも「一ている」の形で状態を表すのに用い、」「ある状態を帯びることを表わす動詞」として「第四種の動詞」とよんだ動詞類に関連している。金田一（1950）は「聳える」「すぐれる」「ありふれる」などの例を挙げたのち「第三の瞬間動詞と第四種の動詞とを兼ねているものも少くない。釘や火箸のようなものに対して、「この釘（火箸）は曲っている」と言う時は、その釘や火箸は嘗て真ッ直だったのが、ある時に曲ったのであるからこの「曲る」は瞬間動詞であるが、「この道は曲っている」と言う時は、初めから曲っているのであるから第四種の動詞の例である」（金田一 1950: 51）として「はじめから～ている」ものについては瞬間動詞（テイル形で結果の残存を表す動詞）ではなく第四種の動詞と考えている。

さらに金田一（[1955] 1976: 44-47）ではこれらを「単純状態態」と名づけ「この道が曲っている」という文に対し「道が『彎曲』という運動を起しつつある」という意味を表す進行態や「道が以前は真直であったが何かの事情で曲った。その結果、曲った状態にある」という意味を表す既然態に対し、「道が「非・真直」という状態にあること」、すなわち「現象の起り終りということを考えずに、ある状態にあることを表わす形」を表すものであるとし、「ある」などの動詞や形容詞もこの「単純状態態」を表すものとした。

金田一の研究をうけた吉川（[1973] 1976）は、ある動作・作用を前提にしてその結果の状態をあらわすテイル形に対し「前提となる動作・作用を問題にしない場合、その結果の状態とは考えないで、単なる状態と考える」（吉川 [1973] 1976: 181）として、「単なる状態」を表すテイルを位置づけた。そして「恒常的状态を意味するものは、どんな動詞から作られていようが、単なる状態をあらわす」とし「なきそうな顔をしていた。 / いかめしい顔をしていた。は共に単なる状態をあらわすが、前者は一時的、後者は恒常的である。前者は「なきそうな顔になっていた」と結果の状態として言いかえられるが、後者は「いかめしい顔になっていた」とは言いかえられない」（吉川 [1973] 1976: 182-183）と述べている。

これらの分析においては「現象の起り終りということを考えずに」（金田一 [1955] 1976）、「前提となる動作・作用を問題にしない場合」（吉川 [1973] 1976）など、基準があまり客観的ではなく（例えば「考え」なかったり「問題にしな」かったりするの誰か）、またかなり抽象的な説明である（例えば本稿の扱う現象ではその状態が実現される前に「反対方向の変化の発生が明示されている」がそれはどのように考えるのか）ため、本稿で問題としているテイル形がこれらの「単なる状態を表す」「単

純状態態の」テイル形であるかどうか、これらの説明からは確定することは難しい。

また寺村(1984)は(前節でも述べたとおり)「その眼前の事態の、他者と比較してのありかたを描こうとする方向に傾くとき、動詞の一つのアスペクトを表わすというよりも、形容詞のような性格を帯びるようになる」(寺村1984: 137)としてこのテイルの用法を「形容詞的用法」とよび、「アノ人ハズイブンフトッテイルネ/彼女ハヤセテイルガ、健康ソウダ」という例を挙げ「当人の過去との比較ではなく、他の人との比較という意味を人はふつうに受けとるだろう。この後者のような～テイルの用法が、従来「単なる状態」とか、「ある状態、性質を帯びていること」を表わす用法とされてきたものである」(寺村1984: 138)と述べた。そして結果状態持続を表すテイル形とは別であることを示すテストとして「一つは、既に見たように、その形と並行して、(未来・未然の)基本形の用法、(過去・已然の)過去形の用法が考えられるかどうかということである。考えられない場合は形容詞的用法である。そしてもう一つは、連体修飾で「～タ」という形になるのがふつうで、その～タ形には、已然(完了)の意味も、過去の意味も感じられない、ということがあるかどうかである。そのテストに通るものは、形容詞的動詞のテイルと考えてよい」(寺村1984: 140)とした。しかしこのテストについても、本稿で扱う現象に生じるテイル形が「形容詞的動詞のテイル形」であるかどうか判定は難しく、むしろ厳密に適用すれば「そうでない」という結果とならざるを得ない。

まず第一のテスト「その形と並行して、(未来・未然の)基本形の用法、(過去・已然の)過去形の用法が考えられるかどうかということ」であるが、「そこに置けば汚れるだろう/これは昨日汚れたハンカチだ」などはそもそも状態変化動詞である「汚れる」の基本的な使用であり、寺村(1984)が挙げる「変わる/知る」などの典型的な例と並行して考えることができるかどうか疑問である¹⁸⁾。

また第二のテスト「連体修飾で「～タ」という形になるのがふつうで、その～タ形には、已然(完了)の意味も、過去の意味も感じられない」であるが、本稿で扱うテイル形については連体修飾で「～タ」という形になることはできない。

- (13) a *まだ少し曲がった棒 (cf. まだ少し曲がっている棒)
b *まだ半分凍った魚 (cf. まだ半分凍っている魚)
c *まだちょっと疲れた人 (cf. まだちょっと疲れている人)

「連体節における状態のタ」を扱った田川(2010)は「昨日から/一日中濡れている/*濡れた タオル」「今も/まだ/ずっと濡れている/*濡れた タオル」などの例において「期間/期限を表す副詞類はタの場合には不可能である」(田川2010: 194)ことから、通常の大サイズの連体節を形成するテイルに対し、タは機能範疇 Asp(ect) に位置し TP/IP のような範疇を含まないとした。

したがって本稿で扱う現象にあらわれるテイル形が寺村(1984)のテストに通らなくても直ちに「単なる状態を表す=形容詞的動詞のテイル形」でないと考える必要はない¹⁹⁾。

しかしこれらのテスト(特に第二のもの)がそのままのかたちでは適用できないとすると、いわゆる単純状態を表すテイル形と、結果状態の持続を表すテイル形は同じか、少なくともはっきりとした区別はできないものになってしまう。これについては今後の課題としたい。

3.2 意味の「関係」あるいは「派生」について

ここではテイル形が「単なる状態」を表すことになる機序について分析を行った金水（1994）をとりあげる。

金水（1994）は連体修飾において形容詞的なタ形をとる動詞（金水（1994）では「形状動詞」とよばれている）について、語彙概念構造レベルで「タ」などを付加し、動詞の概念構造のうち結果の状態を焦点化することによって派生される「構造的形状動詞」と、辞書に特別な情報を付け加える必要のある「語彙的形狀動詞」に分け、前者について以下の分析を行っている。

まず金水（1994: 40）は「動詞の語彙概念構造から、(あれば) 結果の状態 (STATE 節点以下) を「焦点化」することにより構造的形状動詞が派生されるとし、「ここでいう「焦点化」は、意味的には「結果の状態」を前景化し、「出来事 (相変化)」を背景化するということであるが、構造的には次のような効果をもたらす」として「動詞全体の意味を STATE と見なし「項構造への外項の写像を抑制」することを挙げている。さらに「結果の状態の焦点化」という定義の意味的效果について「これは結果の状態を前景化し、出来事を背景化すること」（金水 1994: 44）であると述べ、「背景化とは、可能性として過去における出来事存在を許すが、存在しなくてもよいのであり、それを決めるのは文脈や一般的知識によるのだ」と述べている。

また影山（1996）では英語の -ed 形容詞との対比から、日本語の形容詞的「た」については「完全に形容詞になりきっているわけではないこと」や「統語的な屈折語尾としての性質を残していること」などから、金水（1994）による「「た」の派生が直接に語彙概念構造に適用する」という提案ではなく、「「た」の解釈規則が語彙概念構造に言及して行われる」（影山 1996:133）とした²⁰⁾が、「概念構造の STATE (すなわち, y BE AT-z) の部分全体にハイライトを当てる」（影山 1996: 134）として、「結果状態の焦点化」という考え自体は受け継いでいる²¹⁾。

しかしここではその考え自体に疑義を呈する。まず批判のひとつは「変化動詞の語彙概念構造に含まれるとされる結果状態 (STATE) がそれほど自明のものではない」ことである。

状態変化動詞には「特定の状態への変化」を表す動詞（語彙概念構造では [EVENT y BECOME [STATE y BE AT-z]] という表記となる）のほか、degree achievement として扱われてきたような漸進的变化を表す動詞が少なからず存在する。このような動詞について、影山（1996: 第 2 章）などでは (BECOME ではなく) MOVE を用いることにより解決を試みているが、「特定の状態への変化」を表す動詞であってもその変化過程を段階的に表すことができるものも多く、また着点を表すことにより MOVE 動詞が BECOME 動詞と同じ性質を示すようになるという現象も説明しにくい。さらに語彙概念構造では [STATE y BE AT-z] という部分を状態変化の「結果状態」として考えるため、例えば「乾く」という動詞であれば「乾いた状態」を上限とする、上限閉鎖スケールをもつ状態変化動詞として分析されるが、本稿第 2 節で確認したところでは、むしろ下限閉鎖スケールをもつ状態変化動詞が本稿の扱う現象をよく示すことから、「濡れる」という動詞を同じように「濡れた状態」を上限とする、上限閉鎖スケールをもつ状態変化動詞であると単純に分析することは避けなければならない²²⁾。

またふたつめの批判として、金水（1994）が述べる「焦点化」というものの実態が明確でないことが挙げられる。確かに金水（1994）にはこの「焦点化」ということについて、本節でもみてきたように「意味的には「結果の状態」を前景化し、「出来事 (相変化)」を背景化するということである」「背景化とは、可能性として過去における出来事存在を許すが、存在しなくてもよいのであり、それを

決めるのは文脈や一般的知識による」と説明されているが、やはり「前景化/背景化」などという用語が厳密なものでなく、「構造的な効果をもたらす」として示された「動詞全体の意味を STATE と見な」すことについては、語彙概念構造における STATE の扱いに疑問があることなどから、やはり厳密なものでないといわざるを得ない。

3.3 動詞について

ここではいわゆる「単純状態を表す」テイル形をもつことができる動詞について先行研究が述べたことを簡単にまとめ、本稿第2節で挙げた動詞と比較する。

はじめに金田一（[1955] 1976: 46-47）で挙げられた単純状態をもつものについてまとめる：

(1) 動作・作用を表す動詞には単純状態がない（単純状態をもつのは状態を表わす動詞、形容詞、及び「一だ」の形）。(2) 状態を表す一部の動詞、形容詞、「一だ」の形はそれだけで単純状態を表わす。状態を表わす動詞の一部は「一ている」をつけて初めて単純状態を表わす（第四種の動詞）。(3) 精神作用を表す動詞の中には「た」をつけて、単純状態を表わすものが少数ある：困る/おどろく/あきれるなど。

また藤井（[1966] 1976: 112-113）は、動作の進行（「読んでいる」）・持続（「じっとしている」）・結果の残存（「結婚している」）・経験（「知り合っている」）・反復をあらわすテイル形のほかに「単純状態」を表すものがあり、いわゆる「第四種の動詞」に関連するもの以外では、「人の態度に関する意味を表すもの」の全部（「かいかぶる、ひねくれる、うぬぼれる、すます、思い上がる、厚着する」）、「瞬間動詞かつ結果動詞」の結果動詞の一部（「曲る、結婚する、見つかる、始まる、出発する、到着する、（雨が）止む、知る、しゃがむ」）、「徐々の変化の結果を表わすもの」の一部（「ささくれる、ふとる、やせる、古びる、つかれる、（おなかが）すく、あせる」）からつくられるとし、これ以外の「継続動詞」および「動作・作用を表すが、同時にそれに対するある種の「評価」をも含んでいるため、瞬間動詞とも継続動詞とも決めがたいもの」（「悪走する、朝起きする、誤診する」）などはテイル形で「単純状態」を表せないとしている。

また吉川（[1973] 1976: 183-191）は、おなじく第四種の動詞に関連するもの以外では、本稿第2節で挙げた奥田（2015）のいう「状態動詞」的なものとして「わたる、はなれる、かわる」の類（「単なる状態」をあらわす以外に「継続」や「結果の状態」をあらわすこともあるもの）、「顔をしている、色をしている、形をしている」の類、「オノマトペ（擬態語）+している」（「がさがさする、ぬくぬくする、がっしりする」）を、また過程をあらわす動詞から作られる場合として「過程をあらわす動詞が過程としてとらえられない場合：動きが緩慢なための長すぎる過程」として「はえる（生える）、しげる」、文脈が「単なる状態」の意味を与える場合として「不動産等主語+続いている、連なっている」、物の配置、位置関係の表現で、日常物を主体にし他動詞を使う」として「へだてる、向ける」、そのほか「道」をあらわす語が主語+通っている、走っている、「へばりつく、むらがる」、「なる」、「できる」を挙げ、単なる状態の意味にならないものとして「「きえている、なくなっている、うまれていく」などについては、「結果の状態」の意味はあるが、「単なる状態」の意味になることはない。消滅、出現のような絶対的変化は過程としてしかとらえようがないからである。」（吉川 [1973] 1976: 191）と述べている。

しかしこれらの研究では、テイル形で単純状態を表す動詞についてある程度具体的に述べられては

いるものの、「～の一部」として例が挙げられているだけのものもあり、さらにこれらの動詞が単純状態を表す理由や機序についてはほとんど言及されていない。

3.4 本稿で扱ったテイル形との関係

以上、いわゆる「単純状態を表す」テイル形について、その意味および結果状態のテイル形との関係 (3.1)、生じる機序 (3.2)、該当する動詞 (3.3) についてみてきたが、いずれも明確に示されているというわけではなく、本稿で扱う現象にあらわれるテイル形がそれに該当するかどうかを見極めることはできなかった。

本稿で扱う現象にあらわれるテイル形について、第3節で扱った順にそれぞれまとめておく。

1) 状態変化動詞が語彙的にもつスケール（程度スケールなど）が時間軸と結びつけられ「標準値」と「当該の対象の（言及时的）値」との差がそこに反映される場合、テイル形で表される状態は（初期値を標準値とした）「状態変化事象」発生後の結果状態として解釈され、そうでない場合（時間軸と結びつけられない場合）は状態変化とは関係のない状態として解釈される。

2) 生じる機序については上述のとおり。

3) この意味でのテイル形をもつ動詞は、本稿第2節でみたとおり基本的に「下限閉鎖スケールを語彙的にもつ動詞（ここでは「異常な状態」への変化を表す動詞も含める）」で、かつ「スケールのもつ方向性が時間軸と独立して解釈することができる」動詞である²³⁾。

4. まとめと課題

本稿は「状態変化動詞のテイル形が通常表す状態変化と反対の方向への変化が起きたにもかかわらず対象の状態を表すことができる場合」について、1) 程度スケールや対象スケールが下限閉鎖スケールをもつ動詞の場合（後者はすべて）、2) 「通常の状態」が設定でき「異常な状態」への「変化」を表す動詞の場合、そして3) 奥田（2015）の示す「状態動詞」である場合があることを示し、これらの動詞のテイル形が「状態変化」事象とは関係なく対象の状態を記述できるためであるとした。また下限閉鎖程度スケールをもつにもかかわらず当該の現象を示すことのない動詞については、動詞の語彙的意味として「変化の方向性」をもつためであるとした。

しかし「結果状態のテイル形」と「単純状態のテイル形」の違いおよび他のテイル形との関係、本稿で扱った状態変化動詞テイル形の詳細な意味および「派生」過程、状態変化動詞の網羅的な記述についてはほとんど論を進めることができなかった。また状態を表すことの多い形容詞との比較も行うことができなかった。今後の課題としたい。

注

- 1) 「こちらのほうがもっと濡れている」といえることから、このスケールは段階的であることがわかる（ただし「濡れている部分が多い」という解釈を除く）。
- 2) 同じように下限閉鎖・段階的スケールをもつにもかかわらず本稿で扱う現象を示さない動詞については2.3でみる。
- 3) Kennedy and McNally（2005）では下限閉鎖スケールをもつ形容詞について *partially* や *slightly* で修飾できることなどを挙げているが、現代日本語の状態変化動詞が語彙的にもつスケール

ルをテストする場合、「少し」などの修飾表現をそのままあてはめて適用することはできない。これは Kennedy and Levin (2008) などでも示されているように、動詞の場合は初期程度値（変化前の程度値）を「下限」とした閉鎖スケールが新たにつくられるためである。

- 4) 「多数の棘の多くは抜けたが、まだ刺さっている棘がある」という意味を表す場合は「刺さった」という（結果）状態が持続している棘がまだ存在する」という意味であり、その場合は対象の数を表すと考えられる（ただし抽象的な事象を表す場合はそれほどはっきり区別できないこともある）。また状態の不変化を表す「～たまま」で同様の意味を表すことができる場合、対象の部分における変化であると考えることができる（cf. 「まだ半分凍っている」と「まだ半分凍ったままだ」）。
- 5) これらの動詞を用いた場合であっても、文脈や修飾表現によって程度スケールが導入されることもある（「より真ん中にノぎっしりと集まっている」）。
- 6) 「通常の状態」から少しでもへこむと「へこむ」ということができることから、ここで挙げる動詞は「下限閉鎖スケールをもつ動詞」に分類してもよいものも多く含まれる。具体的な分析については2.4で行うが、下限閉鎖スケールをもつかどうかそれほど明確でないものもあるため、この類をたてる。「酔う」や「疑う」などの動詞についても同様である。
- 7) 「痺れる」などの動詞については状態変化動詞というよりは後述する5)「状態動詞」に含まれると考えられる。またこの後に挙げる動詞（特に心理状態を表す動詞）にも状態変化動詞というよりは状態動詞に含めたほうがよいとも考えられるものもあり、正確な分類については今後の課題としたい。
- 8) このほかに「ひかる、なる」、類例としては「回る、揺れる、湧き出る、出血する」など、ものの運動を表す動詞も同様にふるまうように思われるが、程度そのものというよりは「回るスピード」「湧き出る量」などが関連するため、今回は除外した。
- 9) ただしこれらの動詞は、状態変化動詞というよりは2.2で述べた奥田（2015）でいう「状態動詞」として用いられるものも多いようである。
- 10) ただし「着る」「髪を切る」などの再帰的な意味をもつ動詞を除く。
- 11) 上限閉鎖スケールをもつ状態変化動詞の場合、「完全に」などの修飾表現と共起可能である。Kennedy and McNally（2005）なども参照。
- 12) 「～化する」という動詞は「女性化する」「希薄化する」のように上限閉鎖動詞となるほうが多いようである。影山（2008）も参照。
- 13) 物理的位置に関する動詞のうち「離れる」などは、以下のとおり本稿で扱う現象を示す。
 - i) 少し近づけたが、まだだいぶ離れている。
- 14) 「まだかなりの部分が染まったままだ」という全体・部分関係に基づく解釈は可能であるが、「(全体的に)色が落ちていない」という程度的意味では非常に難しい。
- 15) この場合（「少し広がっている」）は「(初期状態に比べて)少し」という意味をもち、その場合「初期状態」を下限とする閉鎖スケールを形成する。Kennedy and Levin (2008) および本稿2.4を参照。
- 16) ここでは動詞について述べているため「語彙的に」決まっているとしたが、その他の動詞の場合であっても文脈的にはっきりと決まっているのであれば同様に考えることができる。
- 17) また「焼ける、腐る」などの動詞のように、動詞を記述する事象を経なければそのような状態（焼

けた状態、腐った状態)になることがない場合も「当該の状態に至る状態変化を必然的に要求することになる」が、その場合の影響については今後の課題としたい。

- 18) ただし寺村 (1984) はほかにも多くの動詞 (「食べる / 歩く」などのいわゆる動作動詞以外) を「～テイルが形容詞的にもなるし、アスペクト的にもなる」と考えているようである (寺村 1984: 142-143 など)。
- 19) 寺村 (1984: 197-199) にもテイル形とタ形で意味が微妙に異なる例や、どちらかの形が不適切あるいは不可能である例が示されている。
- 20) 「英語の -ed が概念構造に直接的に作用して新しい概念構造…に組み替えるのに対し、日本語の統語的な「た」はそのような概念構造の組み替えの働きはないものと考えられる」(影山 1996: 133)
- 21) いわゆる「連体修飾のタ」を形式意味論で扱った Ogihara (2004) も金田一 (1950) の挙げる「曲った道」という例について “[t]he entire adjectival relative *magat-ta* ‘bend-PAST’ simply indicates the state being curved” (Ogihara 2004: 576) と述べ、この「連体修飾」(adjectival relative) について “I propose to characterize adjectival relatives as those that describe a locational or physical property that *appears* to have resulted from a past event (based upon evidence obtained through our senses)” (Ogihara 2004: 576) という modal な性質をもつものであるとし、やはり「結果状態」説をとっている。
- 22) このような状態変化動詞の分析については小西 (2015) を参照。
- 23) ここでは「動詞」としたが、これまで述べたとおり共起表現や文脈等による解釈を含めて考える。

文献

- 藤井正 (1966) 「「動詞+ている」の意味」, 金田一春彦編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』, 東京: むぎ書房, 97-116.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論 一言語と認知の接点』, 東京: くろしお出版.
- 影山太郎 (2008) 「属性叙述と語形成」, 益岡隆志編 『叙述類型論』, 東京: くろしお出版, 21-43.
- Kennedy, Christopher (2007) Vagueness and grammar: the semantics of relative and absolute adjectives. *Linguistics and Philosophy* 30 (1). 1-45.
- Kennedy, Christopher and Beth Levin (2008) Measure of change: The adjectival core of degree achievements. Louise McNally and Christopher Kennedy (eds.), *Adjectives and adverbs: syntax, semantics, and discourse*. New York: Oxford University Press. 156-182.
- Kennedy, Christopher and Louise McNally (2005) Scale structure, degree modification, and the semantics of gradable predicates. *Language* 81. 345-381.
- 金田一春彦 (1950) 「國語動詞の一分類」, 『言語研究』 15, 48-63.
- 金田一春彦 (1955) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」, 金田一春彦編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』, 東京: むぎ書房, 27-61.
- 金水敏 (1994) 「連体修飾の「～タ」について」, 田窪行則編 『日本語の名詞修飾表現』, 東京: くろしお出版, 29-65.
- 小西正人 (2015) 「状態変化動詞の事象投射構造」, 『北海道文教大学論集』 第 16 号, 123-149.
- 日本語記述文法研究会編 (2007) 『現代日本語文法 3』, 東京: くろしお出版.

- Ogihara, Toshiyuki (2004) Adjectival Relatives. *Linguistics and Philosophy* 27(5). 557-608.
- 奥田靖雄 (2015) 「動詞論」, 奥田靖雄著作集刊行委員会編『奥田靖雄著作集 3 言語学編 (2)』, 東京: むぎ書房, 5-114.
- 田川拓海 (2010) 「連体節における状態のタの統語的分析と否定辞の統語的位置」, KLS 30 : Proceedings of the 34th Annual Meeting of The Kansai Linguistic Society (2010), 192-202.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』, 東京: くろしお出版.
- 吉川武時 (1973) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」, 金田一春彦編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』, 東京: むぎ書房, 155-327.

The Direction of the Change and the *-te i-* form in Japanese

KONISHI Masato

Abstract: In Japanese, there are sentences with the *-te i-* forms of change-of-state verbs, which is similar to English adjectival past participles. But some of them can represent the states of the objects/themes even though they have changed in the opposite direction which the verbs lexically describe.

Kore, daibu massugu-ni si-ta kedo, mada sukosi magat-te i-ru.
this much straight-ly do-PST but still a little bend-*te i*-PRS
“I’ve straightened this much, but it is still slightly bent.”

In this paper I presented the change-of-state verbs which can represent such meaning in this construction and which cannot. Then I showed the property of the verbs which is needed to make this construction applicable: to have gradual scales with a lower limit. And as for verbs which cannot fit this construction but have lower-closed gradual scales, such as *kusar-u* ‘rot’ and *toke-ru* ‘melt,’ I insisted that it is because they lexically have the fixed directions of the changes they describe.

Then I overviewed some previous research of the *-te i-* form representing “simple state” to compare my observations in this paper with these three topics: 1) the relation with the *-te i-* form representing resultant state, 2) the mechanism to produce this “simple state” meaning, and 3) the verbs which can produce this meaning. But unfortunately I couldn’t relate the *-te i-* form in this paper with former research explicitly because of subjective or insufficient expressions in previous papers, so I finally summarized a property of this *-te i-* form in this paper as follows: when these scales in change-of-state verbs relate with the time axis, their “standard degrees” are interpreted as the initial degrees (before the events) and the states represented by *-te i-* forms are understood as “resultant states,” but when they don’t relate with the time axis, their “standard degrees” are interpreted literally as “standard degrees” and the states represented by *-te i-* forms are understood as states different from the “standard.”

Keywords: change-of-state verbs, direction of change, “simple state” *-te i-* form, degree scale